

# 空覚の刊本について

徳岡亮英

## 一、出版

「出版」という言葉は江戸時代には「出板」と書かれ、「版」は「板」と同義で「板切れ」の事である。出板、板に出す、とは、板に彫り出すことであり、板に彫り出したものを刷って世に出すことである。この板には一般に梓あずきが用いられたから、出板の事を上梓とも言い、また鋳梓しんともいう。これは出版の手段から来た言葉であり、英語の publication が public にする事、publish する事、公にする事、公表する事を意味して、出版の目的から来た言葉であるのとよい対比をなしている。

ヨーロッパでの印刷は西暦一四四六年の Gutenberg の鑄字によるものが最初であるとされるが、東洋に於ては古くから印刷技術が発達し、それは仏典を出版するのが主な目的であった。法隆寺に遺されている百万塔内の陀羅尼は現存世界最古の印刷物であるが、天平宝字八年（七六四）に始められた百万塔奉納の大事業は陀羅尼の印刷という技術によって達成された事業であり、書写では到底不可能な事であった。ましてや八万四千の法門と称される大蔵経の書写は容易な業ではなく、この大蔵経を流布させる為に考えられたのが印刷という技術であった。版木に

空覚の刊本について

文字を彫って印刷するという印刷技術は中国に於て既に九世紀頃から行われていたようで、宋の太祖が西暦九七一年から九八三年にかけて四川省成都で版木十三万枚を彫らせて出版させた大蔵経は北宋版又は蜀版と称され、これは寛和二年（九八六）東大寺の奄然によって釈迦木像と共に日本にも将来されたが、日本に於ても奈良の各寺院などに於て木版による仏典の出版が行われるようになった。

やがて中国では出版に木活字が使用されるようになった。鑄字も試みられたが、木活字は鑄字に比べて製作し易く、又版木のような大きな板を必要としなかった。元の仁宋の頃十四世紀の初頭に木活字が使用され、清の乾隆三十八年（一七七三）から三十九年にかけて二十五万余の木活字を使つての出版が企てられた。鑄字による出版は朝鮮に於て発達し盛行して、鑄字による刊本が朝鮮から日本に伝えられたのは天正二十年（一五九二）の事である。日本ではその二年前の天正十八年に鑄字による出版が九州に於て宣教師たちによって始められていたが、以後鑄字、木活字による出版が日本に於ても盛行した。

活字による出版は江戸時代になって盛になり、十七世紀前半から中葉にかけてがその全盛時代であった。御水尾帝や家康の銅活字による出版、寺院其の他による鑄字や木活字による出版が相次いだ。木活字による出版は木版による出版よりも費用が少なくすみ、植字版、一字版などと称されて盛になったが、漢文の返り点、送り仮名をつけなくてはならないものには不向きであった。その点版木によるものは植字の技術は不要であり、且部数を多く刷る必要のある出版には適していた。

鉄眼道光が予てから抱いていた一切経刊行の志が具体化したのは寛文八年（一六六八）頃であり、約十年の歳月をかけて業成つたのは延宝六年（一六七八）である。これは師隠元から寄与された明の万曆蔵経の覆刻で、明朝体

の字の木版本である。空覚が観門義四十一卷の跋文を書いたのは寛文十一年（一六七二）で、まさしく鉄眼の一切の経の刊行と時を同じくしていることになる。

空覚刊行の観門義四十三巻も木版本であると考えられて来た。最近、西山叢書第三巻、往生礼讃自筆御鈔、法事積学鈔の刊行に当って、空覚の刊本と坂本西教寺蔵の仮名書き写本との校合をして見て、若しかしたら少くとも往生礼讃観門義は木活字による刊行ではないかと考えられる点があるので、その事について述べるのが本稿の目的である。

## 二、空覚の跋文

空覚がどのようにして観門義を刊行したかは跋文から知る事が出来るが、跋文に述べられていない事でも刊本そのものから推知される事もあるであろう。玄、序、定、散の各観門義に跋文はなく、跋文のあるのは般舟讃観門義と法事積学鈔とである。般舟讃の跋文の日付は「寛文辛亥仲春日」、積学鈔は「寛文辛亥秋八月日」である。両者の間には約半年の開きがあるが、当初の目的は自筆鈔だけで、自筆鈔が終った時点で一旦跋文を書き、次いで積学鈔を始め、積学鈔の版下、原稿が出来上ったのがその半年後であったという事になる。證空自筆の鈔が書き留められたのが建保三年（一二二五）から嘉禄二年（一二二六）までで、その順序は大体に於て、玄、序、定、散、観、般、礼の順であるが、空覚の刊本はその順ではなく、具疏については観、礼、般、或は礼、観、般の順序で、般舟讃観門義が何れにしても最後であったようである。

跋文の中には多くの事が述べられているが、刊行に関する事だけを検討して見る。

### 空覚の刊本について

空寛は二尊院所蔵の證空自筆鈔の惠篤の筆写本を読んで、喜びのあまりそれを数年かけて筆写して秘蔵していたが、自分も寄る年波、今年で六十才になり、さきももうそう長くはないと思つて、「寛乙酉臘月換仮名字、翻漢字而、欲授予門子、明年仲春庚戌採毫欲為漢字」とある。この乙酉は己酉の誤りで、寛文九年（一六六九）である事は明らかであり、丁度鉄眼の一切経刊行が緒についた頃となるが、寛文九年十二月に自分の筆写本の仮名を漢字に直して門弟達に授けようと思ひ立って、實際仕事を始めたのが翌十年の春であり、跋文の日付は辛亥仲春日、即ち同十一年の春であるから、その間一年、「翻漢字」の仕事は一年足らずで完了した事になる。この「翻漢字」はただ単に機械的に仮名を漢字にするだけの仕事ではなく、實際は「翻漢文」で文章自体も和文から漢文に翻訳する仕事であったと考えられ、跋文の言う通り当初はその刊行はまだ確定的ではなかったとすると、脱稿してから上梓が決して跋文を書くに至るまでも幾らかの日時を要したであろうから、この一年はあまりにも短すぎるように見える。或は我々のこの跋文の読み方に何等かの誤り、誤解があるのであろうか。

空寛はこの「改漢字」の仕事には誤が大変多いに違いないが、それでも「訳漢字唯機健而其功成」と述べている。この「改漢字」も文字通り仮名を漢字に改める事ではなく、「訳漢字」即ち和文を漢文に翻訳する事である。門弟達に授ける為にただ仮名を漢字に直す事ではあまり意味がない。空寛は鉄眼の一切経刊行の大事業に刺戟されて、證空の自筆鈔を漢訳してこれを刊行しようと思ひ立ったのではないであらうか。跋文は「機健而其功成」につづいて、「於此數輩之門流、割之板、備不巧而請伝後世、遂不得止而鏤梓、行世」と述べていて、「翻漢字」が完了した時、門流の中の数人が出板して後世に伝えたいと請うたので、止む得ずその請を入れて出板する事になった、という文になっていて、實際は何人かが是非出板したいと言ひ出して刊行する事になったのであろうが、この

「不得止而」の句はその次に述べられている、どうか文章にとらわれて意味を取り損わないでほしい、才の拙いための構文の間違いなどを責めないでほしい、という空覚の気持を顕わしているのであって、空覚が證空の自筆鈔の漢訳を始めたのは、たゞ自分の門弟に与える為だけではなく、その時機は未定ではあるものの、いつかはその刊行によって宗義を後世に伝えたいという意図があったと考えるべきであろう。そして、その目的は十二分に達成されたのである。然し、ここにも一つの難問がある。なぜ和文を漢文にしたかという事である。鉄眼の一切経は万曆藏経の覆刻であるから、漢文白文で、藏経がそのまま出板の為の版下になるのであり、問題は開板と刊行、及その費用とだけであったであろうが、空覚が拙い漢文であるという危惧を持ちながらも、もともと和文であったのを漢文に翻訳し、返り点送り仮名を付けて刊行したのはどういう意図によるのであろうか。当時は木版による一切経の刊行が行われようとしていた一方、木活字による刊行も全盛時代を過ぎたとはいえ行われていたであろうし、和文の刊行もなかった訳ではない。「西山上人縁起」は木活字本として正保三年（一六四六）に和文で刊行されているが、空覚が自筆鈔を観門義として漢訳して刊行したのは「縁起」と「鈔」との違いなのであろうか。学術書、思想書は漢文である方が説得力がある、重みがあるというような通念が当時の出版界にあったのであろうか。当時の出版界の事情を全く知らない筆者にとって、これは筆者の推量に過ぎない。跋文には出板の費用の事は全く言及されなく、木版本に比べて木活字本の方が費用が少なくすむと言われ、前述したように少なくとも往生礼讃観門義は木活字本のように見えるが、和文の漢文化は必要とする板の数を少なくするための方便、費用の軽減の為であったとは安直に言う事は出来ないであろう。

#### 空覚の刊本について

## 三、刊行の手順

この觀門義出版の大事業は實際にどのように行われたのであろうか。跋文には何も述べる所がないので、跋文が言外に示していると考えられる事、現存の刊本そのものなどから推測する外はないが、大体の処を推測して見ると或は左の如くなるであらうか。鉄眼の一切経の刊行には原稿を書くという労はないが、この觀門義の刊行にはそれが必要である。跋文では空覚が和文の自筆鈔を漢訳して、その原稿は空覚が書いたように見えるが果してそうであらうか。僅か一年足らずの空覚一人の仕事としては量があまりにも尠大である。要した期間がもっと長ければ納得し易いが、それにしてもとにかく、漢文の原稿は空覚が書いたという事は認めなくてはならないであらう。跋文の書き方から見て、何人かで分担したとは考えられない。最初は一人で始めて途中から何人かが加わったという事も考えられない事はないが、そう理解するよりも、ここは先ず空覚の超人的な努力を認めるべきなのであろう。

扱、その漢文であるが、それは初から返り点、送り仮名まで付けた叮嚀なものであったのであろうか。これは全く現代の我々の感覚からの推測であるが、先ず初は仮名書きの原本を見ながら白文の漢文にして行ったのではないであらうか。そして、二度手間ではあるが、それにあとで仮名書き原本を見ながら、返り点、送り仮名を付けて行くのである。あとの作業は原稿の誤りを見出す校合の仕事も兼ねる事になり、ある意味では機械的な作業であつてもよい。それが忠実に行われていれば「拙い漢文」ではあつても、読めばもとの仮名書きの原文に戻る筈である。それが現刊本には漢字の並び方は大体正しいのに返り点、送り仮名の付け方が間違っているという例が多い。漢文は訓点、返り点、送り仮名がなくても大きな読み誤りはないという気で仮名書き原本との対照をおろそかにした為

の誤りと理解されるような誤り、仮名に漢字を当てる時の誤りとその誤りの為の拙い漢文を漢文として読もうとして而も手もとに仮名書き原本がなかった為の誤りなど色々な誤りが現刊本にはある。これは現刊本の原稿の和文を漢文の白文にした時とこれに返り点、送り仮名を付けた時とは時が異なるという証拠であり、この事は又、その時だけではなく人も違うという事の可能性をも示している事になるが、一応、和文を漢文白文にしたのは空寛である と理解すべきであろう。然し、これにあとで返り点、送り仮名を付けたのは空寛一人だけではない、というよりも、空寛の仕事はまさしく「翻漢字」、即ち和文を返り点、送り仮名のない白文の漢文に翻訳する事だけで、返り点、送り仮名を付ける仕事は門流の人、或は人々があとから行ったと理解する方が或は事実に近いのではないであろうか。

観門義の原稿が出来上って跋文も書かれるといよいよ出版という事になる。木版本であれば、その版下の版木への鏤出、木活字本であれば木活字の製作とそれの植字とが次の仕事となる。新たに木活字を作る作業が必要であれば版木に彫るのと木活字を作るのと作業は同じである。訓点の付いた漢文であれば尚更、初から版木に全部彫り出す方が植字の手間がかからないだけ人件費は少なくてすむ。それにも拘らず植字版、一字版の方が簡便で重宝されたという事は、やはり人件費よりも版木の調達の方が高かついたという事であろうか。木活字の植字による出版という当時の出版界の事情を全く知らない筆者にとっては、どうしても現在の鑄字の活字による出版から類推して丁うが、現在木活字が殆ど残っていないのは何故であろうか。新に版を起す時に特別に作って、用がすめば使い捨てであったのであろうか。又出来合いの木活字を使うのではなく、新たに木活字をその目的の為にのみ作るのであれば、一字版と言いながら、よく使われる熟語は二字、三字を一つの木に彫り込めば植字の手間はそれだけ省ける訳

#### 空寛の刊本について

であり、返り点、送り仮名も同様である。返り点、送り仮名もいれて活字を作ったと考える方が合理的である。そうすると、一つの木活字の中の字数、字数によるその大きさも限りなく自由であるという事になり、調達出来た板の大きさと植字の件数とのバランスの上に立つ木活字本は、一字の木活字から一丁全部の木版まで、使用される板の大きさは区々であり得る事になるが、木活字版という事になるとやはり一字、二字、三字などの活字が主であると考えるべきなのであろうか。

誤植のない出版はない、と言われる。然しそれが誤植であるか、もとの原稿が間違っていたのかは、合理的に推理出来る場合もあろうし、出来ない場合もあるであろう。しかし何れにしても推測の域を出る事は出来ない。今回往生礼讚自筆御鈔の刊行に当って、空覚の往生礼讚観門義と西教寺蔵の仮名書き写本とを校合して見て、往生礼讚観門義は、現刊本そのものに、或はこれは木活字本ではないかと推測される、というより推測せざるを得ない点があるので、その推測を述べて、諸賢の御教示を仰ぎたいと思う考である。

#### 四、改 漢 字

多くの写本を校合して発見される最もありふれたミスは脱文である。脱文のない写本はないと言ってよいであろう。これは二本の校合によってのみ発見され、而も相互に必ずある。一本だけでは、文章がおかしいから脱文があるようだと思っても、ただそう思うだけで、それで終りである。比較研究という研究はあらゆる分野に必ずある真実探究の不可欠の方法であるが、往生礼讚観門義刊本（以下刊本と略称する）と西教寺蔵の往生礼讚仮名書き写本（以下写本と略称する）とを校合して、双方の脱文はお互に補う事が出来、よりよき理解が可能になる。観門義の

原稿は、空覚の筆写した写本をもとにしているようである。その脱文が惠篤の二尊院本にもあったかどうかという事は今回は別の問題である。

観門義には仮名への漢字の当て間違いが随分ある。これは全く初歩的な誤りである。空覚は無常迅速を覚ってこの仕事を始めたとあるが、空覚の歿したのは元禄四年（一六九一）であるから、この頃肉体的にそう衰えていたとは考えられないし、漢文にして四十一巻の書物の刊行という大事業のその原稿を何故一年以内に書いて了ったのであろうか。何か急がなくてはならない理由があったのであろうか。和文を漢文にする事は機械的には出来ない所の方が多いであろう。然し仮名に漢字を当てる事は急いで意味を深く考えずに行えば全くのその時の気分次第の機械的な仕事になって了う。急げば急ぐ程機械的になる。観経疏の観門義には特にそのような当て字が多い。「名ヲ」とすべき所を「尚」<sup>(1)</sup>、「闇ク」と当てるべき所を「苦楽」<sup>(2)</sup>としたりしている。この「闇ク」と「苦楽」はどちらも通じない事はないように見えるが、写本には「クラク」と仮名になっていたと考えられ、この「クラク」を漢語の「苦楽」と理解するのは全く安直な推量によるものである。漢語の「苦楽」を「クラク」と仮名にして書くという例は殆んどないからである。「ミナ」を「三十」<sup>(3)</sup>、「ハナ」を「八十」<sup>(4)</sup>とした例もある。前者は法相に通じていない為の字の見誤りの安直な当て字である。更に、次のような「分ヲヨヒカタキ」を「難」<sup>(5)</sup>呼フ……分<sup>(5)</sup>という漢文にしている例などは全く木を見て森を見ない機械的な作業としか言い様がない。写本の「ヲ」は正しい仮名遣いでそのまま「ヲ」でよいか、「オ」か又は「尚」の「ナヲ」のように「ホ」とすべきかはその時々で判断しなくてはならないが、この「ヲ」は「オ」が正しい。「分及ビ」である。それを「ヲ」を助詞と理解して「分ヲ呼ビ」とするなど、漢文にしる、日本文にしる「分を呼ぶ」などという語法があるのであろうか。このような例は極端

空覚の刊本について

な例であるが、観経疏の観門義には以上のような例があるのであり、空覚の「翻漢字」が非常に急いで仕上げられたという感は否めない。

往生礼讚観門義は玄義分や序分義、定善義の観門義程には上述のようなミスは少ないようである。それでも翻漢字の誤りはある。その例を二つ程あげると左の如くである。

(1) 写本 念仏往生ノ道理ノミアキラカナルヘシ<sup>(6)</sup>

刊本 可<sup>レ</sup>見<sup>ゴ</sup>明<sup>メナル</sup> 念仏往生道理<sup>ヲ</sup>

和文を漢文白文にする作業に於て、「道理ノミ」の「ノ」を「ヲ」に読み誤った為に「ノミ」の「ミ」を動詞の「見ル」と理解して、「ミアキラカ」に「見明」を当てたのである。この場合白文にした時に最後の「カ」を「メ」と読んで「明」を当てたのかどうか、送り仮名を付けた人はこの「見明」を「見明ラメ」と読んだのである。「道理を見明らかめなり。」何となく意味は解るようであり、それで大体の理解は間違わないが、文章としては英語の動名詞のような、動詞がいつの間にか名詞になっているといった奇妙な語法となっている。この場合、返り点、送り仮名をつける時に原本の仮名書き写本は参照されていない。

(2) 写本 衆生ノ出離ノ大事ヲ成弁スカルカユヘニ王トイフ<sup>(8)</sup>

刊本 成<sup>スル</sup>三衆生<sup>ノ</sup>出離<sup>ノ</sup>大事<sup>ヲ</sup>菩薩<sup>ナルカニ</sup> 故云<sup>レ</sup>王<sup>ト</sup>

これは本を筆写する時の「菩薩」という二字を筆写する時、二字の上部の草冠「サ」を二つ重ねた「苜」をもって代用して出来たその「苜」と「弁」との見誤りである。ここの文章のすぐ前に「法蔵菩薩」という語が出ていて、そこは写本で「法蔵苜」となっており、この「苜」と「弁」とはよく見れば微妙に違うのであるが、それを同じ字

と見誤ったのである。然しその前後の仮名を含めて見ると、写本では「成弁スカルクヘニ」、刊本では「成スル  
 苺ナルカクヘニ」となり、刊本の「ナ」は写本の「カ」の見誤りと考えられない事もないが、「成弁ス」と「成ス  
 ル苺」とは一見して見誤られそうにない。「成スル苺」は「成弁ス」の見誤りではなく、白文の漢文を読む時の  
 必要な送り仮名として「スル」が付けられたと考えるべきであろう。「弁」を「苺」と誤解してそのもとの字「菩  
 薩」に戻して白文にしてしまった為に、あとでこのような送り点と送り仮名を付けなくてはならなかったのである。  
 この場合も前の例と同じくもとの仮名書き写本は参照されていない。あとで送り点、送り仮名を付ける時、もとの  
 仮名書き写本が読み返されていたら、校合の仕事をも兼ねる事になり、非常に合理的なのだが、そのような事はど  
 うも行われていないらしい。

以上の二つの例は仮名に漢字をあてる時の当て違いであるが、始の方は仮名の助詞の読み違いによる漢字の当て  
 違いである。そして二つともその為に漢文の白文を誤っていて、この誤りが更に次の段階の送り点、送り仮名の誤  
 りを誘発している訳である。前述の「ミナ」の「三十」などは漢文の構文を左右しないし、送り点、送り仮名の付  
 け誤りは誘発していないが、「改漢字」の誤りは大体に於て送り点、送り仮名の誤りに結び付くと言ってよいであ  
 る。

## 五、送り点、送り仮名

一般に送り点、送り仮名は訓点と総称される。これは漢文を訓読するためのものであるからである。然し、もと  
 もと和文であったものを漢文にして、この漢文に付けてもとの和文に戻して読ませる為の送り点、送り仮名も訓点

空覚の刊本について

というのであろうか。この場合、訓点という言葉はどうもそぐわないような気がする。訓点の場合、漢字を音読みにしても訓読みにしても意味は大して変らないであろう。然し、仮名を漢字に換えた漢字の読み方は、たとえば動詞の場合、付ける送り仮名が音読みと訓読みとで異なる場合は問題ないが、同じである場合は何等かの工夫をしなければ、忠実にもとの通りの和文に戻して読む事は不可能である。動詞以外の接続詞、「故」もその一例であるが、この事についてはあとで言及する。

扱、翻漢字の仕事が完了して白文の漢文が出来上り、これを又もとの仮名書き和文に戻して読ませる為にこれに返り点、送り仮名を付けるのであるが、この漢文に返り点を付ける作業と送り仮名を付ける作業とは、実際には違う時に、又違う人が行ったとしても、切り放す事の出来ない一連の仕事である。刊本を写本と校合して見て返り点の付け方が間違っている例が多いが、又その為に送り仮名の付け方も間違っていたり、出来上った文章はもとの仮名書きの文章からますます離れたものになっているという例が多い。然しここで留意して置いてもよい事は、文章の一々は如何に変わって行っても、文章全体の言わんとしている事は大筋に於て理解されるのであり、空覚のこの四十一巻の観門義刊行の果たした役割に絶大なものがあるという事は些も変わるものではない。

白文に返り点を付ける作業に於いてもとの仮名書き写本は校合されなかつたようであり、その為の返り点、送り仮名の付け間違いは観門義全般に亘って見られるものである。当刊本の中の一、二の例をあげると左の如くである。

(1) 写本 相コトニ七百五(中略)光明八万四千ノ相海ニ具シツレハ<sup>(10)</sup>

刊本 相<sub>三</sub>積<sub>ニ</sub><sup>ルット云</sup>七百五(中略)光明八万四千相海<sub>ニ</sub><sup>(11)</sup>

ここは弥陀の十二光の名を讚める所で、十二の名があるが、その光の体は無量である、としてこの文が続いている。ここでは写本の「相コトニ……具シツレハ」に対して刊本の「相積ルツト云ニ」がある。大谷大学蔵の写本にはここは「相毎ニ……具シツレハ」とあるから、「翻漢字」のもとになった写本に何かの誤りがあった、刊本のような言葉を異にする漢文になったのであり、こここの漢文、こういう例は珍しいのであるが、返り点の「二」が二箇所にある。漢文の訓点にも、漢字の右側と左側とに二種類のものが付いていて、二種類の読み方があるという事を示している事がよくあるが、ここはどのようなのであろうか。これはもとの和文を漢文体に書き換えたものであるから、二通りの読み方があるという事ではない。それにも拘らず、ここには二通りの読み方が示されているのである。即ち「相積」は二字を熟語として読む読み方で、この「相」は接頭辞の「アヒ」である。「相積ニ」は上の「相」は人相などの相という名詞の主語に読み、下の「積」はその述語の動詞に読む読み方である。もとの和文は「相コトニ……具シツレハ」であるから、この「相」は名詞で、これを白文の漢文にして「毎相具」とすべきを何等かの誤りで「毎」を落して「相積」として了った為、あとで返り点、送り仮名を付ける時この「相」が名詞か接頭辞か分らなくなったのである。それで取り敢えず二種類の返り点を付けて置いて、あとで和文と校合する積りであったのかどうか、それがそのままになって了ったという事であろう。因に、西山全書ではここを「相積ツモテ」と読んでいるが、刊本に「積ルツト云」とある「ルツト云」とあるように見えるこの送り仮名も実に理解に困るもので、この送り仮名が原稿にこのままあったのか、又、鏤刻者の彫り間違いがあるのか、何れも推量の仕様がなない。

(2) 写本 タマノウケタル仏法修行ノウツハモノタル年命<sup>(12)</sup>

刊本 適受タルル為ニ仏法修行機ニ者年命<sup>(13)</sup>

空覚の刊本について

ここは「ウツハモノタル」が「為……機<sup>ル</sup>者」に相当するが、この「一」の返り点を一字下に移して、「者」の「ノ」を送り仮名の「ノ」と見ずに、ルビの「モノ」の「ノ」と理解し、「機<sup>ル</sup>者」を「機者」として、「機」を「ウツハ」と読めばもとの和文通りの読み方となる。返り点を「者」の所に移すだけでもとの和文になるという事は返り点の付け方だけが間違っているという事になる。然しここには何か、返り点の間違いとだけ決めて了えないようなものがある。先ず「機」であるが、ルビを付けずにこの字を「ウツハ」と読ませる事は難しい。「ウツハ」には「器」というぴったりの字があつて<sup>(14)</sup>ここはそれの方がふさわしい。それを「機」としたのは何故であろうか。

「機」は「ウツハ」に当てた漢字ではなく、漢訳であるように見える。そのまま漢字にならないような和語は漢訳せざるを得ず、観門義全体を通じて、空覚はそのような漢訳に苦労しているように見えるが、ここも「器」という字がありながら「機」という字を使ったのはこの空覚の理解を示す漢訳なのである。そしてその漢訳の白文には刊本のような返り点、送り仮名が付くのが自然なのである。ここで和文の「ウツハモノ」は「器物」と当てべきで、修行者の年命をその修行の容器と考えている訳であるが、空覚の漢訳は修行者そのものをその修行の容器と理解する漢訳になっている。その修行者が「機」なのである。返り点を付け替えればもとの和文にはなるが、こここの白文は刊本のように読むのが自然で、空覚もその積りであったと考えられ、厳密に言えば誤訳であるが、「機」という字を使ってこのように漢訳した空覚の意図も何か解るような気がするのである。

往生礼讃の観門義は観経疏の観門義に比べて返り点の付け間違いが多いようである。それは返り点はあとで付けて、その時もとの和文は校合しなかったからであるが、ここで一言して置きたいのは、前にも述べたように、いくらか厳密な校合をして返り点、送り仮名を誤りなく付けたとしても、一旦漢字、漢文にしてたとえばどちらに読んでよ

いか分らない字があるという事である。動詞の音読み、訓読み、接続詞の「故」など、もとの和文を参照せずに正しく読むという事は不可能である。漢文の中に随所に頻出する接続詞の「故」には「ユエニ」と読む場合と、「カルガユエニ」と読む場合とがあつて、前者は文末に来る場合、後者は文頭に来る場合である。仮名書き写本では「ユヘニ」、「カルガユヘニ」と仮名で書いてあるから間違ひはないが、一旦漢文の「故」として了うと、文末、文頭の区別は不可能である。この区別はしなくても意味が大きく変わる事はないが、文の勢は全く違って了う。これは文全体の流れにとっては重要な事である。漢文は意味は伝える事は出来るが、気分は伝える事が出来ない。空覚観門義四十一巻の刊行の意義は大きいが、筆録の日付、その時の天候まで記入された證空自筆の鈔の和文そのままの刊行も亦重要な仕事であると言える。

## 六、木版本と木活字本

以上検討して来た事は、上梓する版下、原稿に既にある誤りについてであつたが、いよいよ上梓の運びとなると、次の問題は木版本にするか、木活字本にするかという事である。木活字本は木版本に比べて安直であるとされるが、植字の手間は余分にかかる事になる。この植字の手間は一つの木活字に多くの字が彫つてあればそれだけ減る事になり、刊行の費用は、板の大きさによる一活字の中の字数と植字の手間とのバランスの上に成り立つ事となる。

跋文<sup>(15)</sup>は漢文白文のままである。これは多分木版であろう。木版にあり得るのは刻者の誤刻である。「己酉」が「乙酉<sup>(16)</sup>」と誤られている事は既に述べたが、これは原稿、版下の誤りであるよりは、刻者の誤刻である公算の方が

空覚の刊本について

大きい。終りの方の「接」と「撰」とはどうであろうか。木版の「接家」、「接禄」は西山全書では「撰家」、「撰籙」に訂正されているが、この「接」と「禄」とは版下で既にそうなっていたのか、それとも刻者の誤刻なのか、これはもう推定の域を出ない問題である。「接」と「撰」との草書は非常によく似ていて、版下は「撰」であったのを刻者が「接」と誤ったようにも見え、又、接と撰との音通から版下で既に、「接」を「撰」の代用として用いていたと考えられない事もない。しかし、どちらかと言えば前者の方が公算が大きい。「禄」については、版下でも「禄」であったと考えられる。「籙」が正しいが、「撰籙」は一般には「撰録」、「撰禄」などとも書かれ「籙」よりもむしろ「禄」の方がよく通用していたからである。

木活字本になると問題は誤植である。誤植のない出版物はないという真理は木活字本に於ても現在の鑄字活字による出版と事情は全く同じ筈である。然し、誤植という事について、現在我々が校正刷を校正する時、誤植だと思っても、念の為原稿を見て見ると、原稿でついつい書き誤っていたという事がよくある。出版物だけを見てすぐに誤植だと決めて了う訳にも行かない。

木版の誤刻と木活字の誤植、これは相似の現象で、これだけから刊本が木版本か木活字本かは推定出来ない。然し、木活字本にはあり得るが木版本にはあり得ないという現象があれば、それはその刊本が木活字本であろうという推定の根拠となる。現在の鑄字による出版でよくある植字のミスに字の顛倒がある。このようなミスは木版の刻字の場合にはあまりないと考えられるが、更に植字のミスの中には、ミスというよりも、何等かの機械的な力があると加わって、活字がもとあった場所から違う場所に飛んでいるという事がよくある。この飛んでいる活字は一字だけという事が多いが、二字以上の場合もあり、又飛んでいるのがその行の上か下かではなく、次の行に飛んでい

るといふ事もよくある。こういう現象は木版本には考えられないが、木活字本には当然起る筈である。往生礼讚観門義の刊本にはこの活字の行飛びではないかと考えられる所が何箇所もあり、一箇所はそのように考えざるを得ないのである。

(1)写本 要ヲトリテトク時ニ諸仏声聞縁覚菩薩<sup>(19)</sup>弥陀ノ光明ヲホムト大経ニトキアラハスナリ<sup>(18)</sup>

刊本 採<sup>テ</sup>要<sup>ク</sup>説<sup>ク</sup>時<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>仏<sup>ノ</sup>声<sup>ノ</sup>聞<sup>ノ</sup>縁<sup>ノ</sup>覚<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>薩<sup>ノ</sup>陀<sup>ノ</sup>先<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>経<sup>ノ</sup>説<sup>ノ</sup>頭

讚<sup>ニ</sup>弥<sup>也</sup><sup>(20)</sup>

刊本の「先明」の「先」は「光」の誤りである事は明らかであるが、この刊本の漢文、このままではどう読めばよいのであろうか。西山全書の多分困った挙句の読みは

採<sup>テ</sup>要<sup>ク</sup>説<sup>ク</sup>時<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>仏<sup>ノ</sup>声<sup>ノ</sup>聞<sup>ノ</sup>縁<sup>ノ</sup>覚<sup>ノ</sup>菩<sup>ノ</sup>薩<sup>ノ</sup>他<sup>ノ</sup>光<sup>ノ</sup>明<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>経<sup>ノ</sup>説<sup>ノ</sup>頭<sup>ニ</sup>讚<sup>ニ</sup>弥<sup>陀<sup>也</sup></sup><sup>(21)</sup>

である。「先」は「光」の誤りであると理解しているが、「陀」を「他」と理解し、「明」の下の返り点の「一」を省き、「弥」の下に「陀」を補って読んでいる訳である。この刊本の文を写本を参照しながら読むと「陀」は「陀」の俗字で、「弥陀」の「陀」であり、漢文としてはこの「陀」の上に「讚<sup>ム</sup>弥<sup>ト</sup>」がなくてはならない事になる。そしてそれは脱落しているのではなく、次の行の行頭に紛れ込んでいたのである。本来の所にあったものが何かの力が加わって行飛びしたのである。鑄字活字による出版に二字の行飛びの例は案外多いかも知れない。然し、漢文の返り点、送り仮名までも一緒にした二字の行飛びの例は殆んどないのではないであろうか。この刊本の現状を見ると、ここ次の行の行頭の「讚<sup>ム</sup>弥<sup>ト</sup>」は一つの活字片になっていたように見える。ただこここの送り仮名は「ムト」とあるべきであり、刊本が「ニソ」とあるのは、「ニソ」とあるように見えるのは、何とも読みようのな

空覚の刊本について

い送り仮名である。何れにしてもここは木活字の行飛びと考えざるを得ず、刊本の少なくともこの箇所は木版ではなく、木活字に依るものであると考えざるを得ないのである。

次の例は脱文あり、誤植あり、活字の行飛びありといったような複合した誤りが重なっていて、脱文については、この相当箇所は大谷大学蔵の写本には欠いているので、この脱文が版下に既にあつたかどうかは不明であるが、或は版下に脱文に伴なう乱れがあつたようにも見え、この誤植らしきものは或はそれに誘発されたのであるかも知れない。活字の行飛びらしきものについては、多分そう理解してもよいように見える。

(2) 写本 イマステニソノトカヲシレリクフル心フカクトヲラハ身ヨリチモイテマナコヨリナミタコホルヘシムナシキ生ヲシマス法ノタメニ心ヲハケマシ身ヲタツヘシトイフ心ナリ乃至小罪若饑即能徹心徹髓トライハツミニ大小ノ不同アリトイヘトモミナ<sup>(22)</sup>

刊本 今既知<sup>ニ</sup>其過<sup>ノ</sup>悔心<sup>ヲ</sup>深徹<sup>シ</sup>身出<sup>レ</sup>血眼<sup>ヲ</sup>涙<sup>ヲ</sup>溢<sup>シ</sup>意也<sup>ト</sup>乃至小罪若饑即能徹心者<sup>ト</sup>可<sup>ク</sup>断<sup>ル</sup>身意也<sup>ト</sup>徹髓者<sup>ト</sup>雖<sup>モ</sup>罪<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>三大小不同<sup>ノ</sup>皆<sup>ニ</sup>皆<sup>ニ</sup><sup>(23)</sup>

刊本の全文を読んでも見ると、意味内容を別にして、文章の面からだけで、「溢意也」が文章になっていないという事が分る。西山全書のように「溢意也」とすれば文章になる。即ち、送り仮名の「ル」の繰り返し「、」を補って全書は理解した訳である。然し、写本と比べて見ると、ここは送り仮名の「、」が落ちているのではなく、「溢」と「意也」の間に「ヘシムナシキ生ヲシマス法ノタメニ心ヲハケマシ身ヲタツヘシトイフ」という脱文があるという事がわかる、即ち「溢」は「意也」に続くのではなく、「ヘシ」に続いていて、「意也」は「トイフ」に続いていたのである。「溢」の送り仮名が間違っていたのではなく、約一行分の脱文があつたために「溢」と

「意也」との間に隙間が出来たという事である。ところが、この脱文の中の「身ヲタツヘシトイフ」は脱落していたのではなく、「可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」という漢文になって次の行の中に紛れこんでいるのである。単に以上だけであれば、ここも前の例と同様に、「可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」という活字の行飛びと理解し、脱文は「ヘシ」から「ハケマシ」までであると理解すればよい事になる。ここで問題を複雑にしているのは、刊本には、行飛びと考えられる「可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」のあとにももう一度「意也」があるという事である。「トイフ心ナリ」の「心ナリ」はこの二つの「意也」の中のどちらであったのであろうか。ここでこの脱文は版下に既にあったかどうかという事を検討して見ると、版下に既にあった場合と版下にはなかったという場合との二つの場合とでは、その版下は次の如くであらうか。

(a) 眼<sup>ヨリ</sup>涙<sup>コホル</sup>溢<sup>シト云ッ</sup>可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>意也 乃至小罪ノ

(b) 眼<sup>ヨリ</sup>可<sup>シト云ッ</sup>涙<sup>コホル</sup>溢<sup>シト云ッ</sup>不<sup>レ</sup>惜<sup>マ</sup>空<sup>シキヤ</sup>生<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>法<sup>ノ</sup>励<sup>シ</sup>心<sup>ヲ</sup>可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>意也 乃至小罪ノ

この二つを並べて見ていると前の例の方が公算が大きい。即ち「ヘシ」から「ハケマシ」までが版下で既に脱落していたのである。そうすると、これを植字して行く場合、「可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>意也」が本来の所に植字されていて、あとでその全部が行飛びしたのであるとすると、「溢<sup>コホル</sup>」の次に「意也」がある事が理解出来ない。多分ここは行飛びしたのは「可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」だけで、「意也」は「溢<sup>コホル</sup>」の次に残っていたのである。即ち、「涙<sup>コホル</sup>溢<sup>シト云ッ</sup>意也 乃至小罪若餓即能徹心者<sup>ト</sup>可<sup>シト云ッ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」となっていたと考えられるのである。そして、あとで、ここが仕事の継目であったかどうか、活字が行飛びしているのに気付かず、「<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」のあとに「意也」を付けて、次の仕事の「徹<sup>ト</sup>髓<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup>」以下を植字して行ったのである。このあとで「意也」を加えたのが植字者の無意識の会通によるのか、版下の「<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>」のあとに「意也」があるのを見てなのかわからないが、版下を見ての付加なら、行飛び活字をもとの位置に戻す仕事の方が必要

空覚の刊本について

であった。それをそのままにして「意也」を加えたのは版下を見たとしてもよく見なかったのか、見ずに行飛びと気付かないままに会通で付け加えたかである。後者であるとすれば、前の例の西山全書の行飛びと気付かず「陀」を「他」と理解して、「弥」の下に「陀」を付加した会通に以ていない事もない。西山全書のここでの改訂が「コホル」の終止形を「コホル」と連体形にする事しか出来なかったのは、「ヘシムナシキ」から「ハケマシ」までの脱文がある事を知りようがなかったからであり、「可<sup>レ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ッ</sup>」が行飛びではないかという事も気付きようがなかったであろう。

写本と刊本を比べて見て、以上のような推定しか出来ないが、刊本のここの現象も、いくら版下に乱れがあったとしても、又鏤刻者の大きな誤刻があったとしても木版では起り得ない事のように見える。ただ事態が(1)の例ほど単純ではないので、ここが木版によらずに木活字によっていると断定は出来ないかも知れないが、木活字本であると考える方が合理的である。若し木活字本であって、ここもその行飛びの例であるとする、この木活字も「可<sup>レ</sup>断<sup>レ</sup>身<sup>ッ</sup>」が一つの木版に彫られてあったという公算が大きい。

- 註(1) 観門義鈔玄義分卷第二、二丁目表10行目||西山全書第三卷玄義分卷第二、25頁上段3行目(西山叢書第一卷玄義分卷一、二七頁上段3行目)、同序分義卷第三、十七裏10||同序分義卷第三、176下12(同序分義卷二、二一四上17)
- (2) 同序分義卷第四、二十二裏7||同卷第四、196上15(同、二三七下12)
- (3) 同定善義卷第二、七表5||同定善義卷第二、226下7(同第二卷定善義卷一、三〇下3、4)
- (4) 同卷第四、十七裏9||同卷第四、264上11(同卷二、八〇下16)
- (5) 同玄義分卷第五、十三表4||同玄義分卷第五、103下8(同第一卷玄義分卷三、一二一下3)
- (6) 西教寺蔵写本第三、五三丁裏1(西山叢書第三卷往生礼讚自筆御鈔卷第三、七〇上7)

- (7) 往生礼讚觀門義鈔卷第五、五丁目表7行目||西山全書第三卷往生礼讚觀門義鈔卷第五、462頁下段7行目
- (8) 同第五、一一裏11(同卷第五、一三七上16)
- (9) 同卷第八、十一裏7、||同卷第八、506上15
- (10) 同第一、五表6(同卷第一、四上1)
- (11) 同卷第一、四表5、同卷第一、415上11
- (12) 同第三、二五裏3(同卷第三、五三上11)
- (13) 同卷第四、四表2||同卷第八、449下6
- (14) 大谷大学蔵写本第三卷十八丁表には写本の「ウツハモノ」に相当する所は「器」となっている。
- (15) 空覚刊本、般舟讚觀門義鈔のあとに付けられている。西山全書第四卷、六六七頁下段―六六九頁下段。
- (16) 同右抜三丁裏5行目、西山全書同右六六八下14行目
- (17) 同抜四裏2、同六六九上10
- (18) 同第三、九裏二(同卷第三、四二下8)
- (19) 写本には「声聞」、「菩薩」とも符号で書かれている。即ち「与与」と「苾苾」。前者は「声」と「聞」の下の部分、「耳」の草書体を利用したものであり、後者は「菩」と「薩」の上部の草冠を二つ重ねたものである。
- (20) 同卷第三、九裏1
- (21) 同卷第三、41上15
- (22) 同第五、四一裏11||四二表5(同卷第五、一五五下13||一五六上1)
- (23) 同卷第十、二裏9||三表1、同卷第十、520下13||15

空覚の刊本について